
love evolution ~恋の進化論~

冬青なぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

love evolution ～恋の進化論～

【Nコード】

N8096T

【作者名】

冬青なぎ

【あらすじ】

同級生の柏木駿に恋する女の子、井上ミサキ。

高校1年の時にたまたま理科準備室であつた2人だったが、そこから先の進展は全くないまま月日は流れ……

3年でやっと同じクラスになることができた。

それでもまだ話しかけることさえ出来ないでいるミサキだったが、高校生活最後の一大イベント【修学旅行】が始まるうとしていた。2人の距離は縮まり、片想いだった恋は進化を遂げるのか。

他サイトにて連載したのですが、加筆修正しながらUPしていきます。

ブローグ

恋に墜ちた瞬間

それがいつだったのか、今でも鮮やかに思い出すことができる

あの日の湿った初夏の空気

窓の外の曇った空の色

理科準備室にならんだ実験器具や、人体模型

そこにそぐわぬ軽やかな君の足音

ふわりと揺れた髪

ほんの少し手と手が触れたときの体温…

何もかもが鮮やかに色づいたワンシーンのように、胸の奥でいつでもよみがえる。

そしてそのたびに、顔が火照るような激しい思いに駆られてしまう

君がすき

あの日、あの瞬間

この心は君に奪われた……………

きっかけ - 1

あれは1年の1学期の終わりの頃。

井上ミサキが柏木駿を特別に意識するようになったのは、あの出来事があってからだった。

それはなんでもない普通の一日のひとコマ。

放課後の理科準備室から始まった。

+

「井上、これ、理科準備室へ運んでおいてくれないか？」

そついいながら、先生が示した指の先にはスーパーによくあるような買い物用のカゴがあった。

「ええ？何ですか？これ」

日直の仕事が終わり、職員室にいる先生に日誌を提出したら早々と帰るつもりだった。窓の外は今にも雨が降りだしそんな気配であ

る。

そんなところに余計な仕事を頼まれた私の気分は、どんよりと今見たふ厚い雲のように暗く沈んでゆく。

「これは明日の授業に使うものだ。大切なものだから落とすなよ」

そう言われて渡されたそれは、見た目よりもズッシリとしていて重かった。

先生、こんなの自分で運べばいいのに……。
傘、持っていないのに雨降り出しそうだよ……。

ぶつぶつ文句を言いながら階段を上がり、やっと理科準備室の前までたどり着く。
ドアに手をかけ、開けようとした。ところが、あろうことが、カギが閉まっているではないか。

ああ！もう！先生つたら！！4階まで運んだのに、鍵閉まっているってどういってこっちゃ！

ムキになり、ドアをガチャガチャやっていると、不意に後ろに気配を感じた。急に現れた人影に驚き、独り言を聞かれた恥ずかしさに恐るおそる振り向くと、そこにいたのが彼だった。

「カギ、開いてないでしょ？今開けるから」

私がさつとドアの前を離れると、その男子は鍵穴にカギを差し込んだ。カチャリと音がしてドアが開く。

「あ…ありがとう」

見上げた横顔に、思わずはつと息を呑む。

うちの学校にこんなカッコイイ人、いたんだ…。

けれど、あの頃の私はその人の名前さえ知らなかった。学年も、クラスはおるか、校内で人気ダントツの男子だということも。

「どういたしまして」

ニコリと微笑む姿に、一瞬ドキリとしてしまった。その笑顔に吸い込まれそうになり、急に体温が上がったように身体が熱くなる。

この気持ちは何だろう？

緊張？

「あの…でもどうして……？」

出てきた声は、我ながら恥ずかしいくらいかすれ気味だった。

「先生が、君にカギ渡すの忘れたから持って行けっ」

いいながら、さり気なく私の手からカゴを引き取る。

「あ……」

反則。

だって、そういうシチュエーションが嫌いな女の子がいるわけない。

例えば彼がイケメン男子じゃなくても、こんな風にされたら女の子は嬉しいもの。

「これ、どこに置けばいい？」

彼は、いとも軽そうにそのカゴを持ち上げるとズンズン準備室の奥へ入っていった。

「その机の上でいいです。運んでもらって、どうもすみません」

同級生だか上級生だかわからないので、とりあえず敬語。

「別にいいよ、それよりさ、これ面白いな」

「え？何がですか？」

「君が運んできたやつ」

彼は、私の気持ちなどお構いなしに、カゴの中の布で包まれたそれをこっそり覗き見している。

「何なんですか？それ」

「知らないで運んでたの？花崗岩。これって放射性物質なんだよ」

「ええ？そうなんですか？」

「うん、御影石ともいう。重かったでしょ？女子にこんな重いもん持たせるなんて、先生も酷いなあ」

「物知りなんですね。ええと……」

「柏木。柏木駿」

「柏木………先輩？」

すると、彼は小さく上品に笑った。

「先輩じゃないよ。俺、一年だから」

「え！？そうなの？なんだ、先輩かと思った。あの、じゃあ柏木くん、どうもありがとう」

私はペコリとお辞儀をすると、急いでその場を立ち去ろうとした。

早くここから離れたい。
でないと私のそわそわしたこの気持ち、柏木くんに気づかれてしまふ。

「あの…」

準備室を出る瞬間、呼び止められて振り向くと柏木くんがこちらを見ていた。

「名前、聞いてもいい？」

そついうとまた、微笑んだ。
眩しい夏の、澄み渡った青空のような笑顔。くつきりとした目鼻立ち。その爽やかで優しいげな視線に射抜かれ、私の心拍数は跳ね上がる。

「……い…井上……ミサキ」

どうしたんだろう、私。
こんな気持ち。不思議な甘さが胸を柔らかく締め付ける。

この気持ちに名前をつけるならば、それは……

それは…

.

1年2組、井上ミサキ。

放課後の理科準備室にて、アツサリと恋に墜ちる…。

+

あれから2年。信じられないことに、高校生活最後の3年で同じ

クラスになれた。

でも、いまだに一方的な私の片思い。

同じクラスの割りには2人に接点はなく、廊下ですれ違っても帰り道に彼を見かけても、私から声を掛けるなんてとてもできなかった。あのときは初対面だったからか意識せず普通に話せたのに、今では到底無理。

きつとあのときのことなんて、柏木君は覚えていないんだろうな……。

そんな憂鬱な日々を終止符を打ったのが、高校生活最後の一大イベント、修学旅行だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8096/>

love evolution ~恋の進化論~

2011年10月7日06時40分発行